

外に出て見聞を広めることで、
子供たちは我が町の良さを知ります。

B & G池田海洋クラブ（香川県小豆島）の活動

いまから 25 年ほど前、地元の小豆島でヨットやモーターボートに親しんでい
た陶山^{すやまてつお}哲夫さんが、仲間を集めて B & G 海洋クラブを立ち上げた。1 年後には内
海町に B & G 海洋センターが完成するので、オープンと同時に活動できるよう
にしておきたいという願いからだった。集まったのは、わずかに大人が 4 名の
み。しかし、陶山さんらは人が集まる浜を選びながらヨットなどの活動を地道
に展開し、1 年後には 10 名、2 年後には定員となる 25 名の子供たちを集めた。
「子供たちには、各地の競技会に参加することで見聞を広めてもらいたかった
のです」と陶山さん。その思いを受けて、クラブの子供たちはヨットやカヌー
の数々の競技会で活躍しながら全国に交流の輪を広げていった。

「子供たちには、各地の競技会に参加
することで見聞を広めてもらいたかった
のです」と陶山さん。その思いを受けて、
クラブの子供たちはヨットやカヌーの
数々の競技会で活躍しながら全国に交
流の輪を広げていった。「最近の子供た
ちは、塾などで忙しくなってきた」と嘆
く陶山さん。しかし、スキー教室などの
新しいメニューを加えながら、いまもな
おクラブ活動は活発に続く。今回は、そ
の四半世紀に及ぶ陶山さんの足取りを
追ってみた。



隣の内海町ならびに池田町で、それぞ
れの B & G 海洋クラブを立ち上げた陶山哲
夫さん。現在は「小豆島ふるさと村」の
専務理事を務めながら B & G 池田海洋ク
ラブの代表として地元の子供たちの世話
を続けている

大会に勝って、ディズニーランドへ行こう！

「大人ばかりではなく、子供たちにも海の楽しさや怖さを知ってもらいたい」
以前からヨットやモーターボートなどに親しんでいた陶山さんは、常々そう考えていたという。そんな願いを叶えるきっかけが、昭和 54 年に訪れた。1 年後には島の内海町に B & G 海洋センターがオープンする。そうなれば、艇庫を使って子供たちにマリンスポーツを教えられるというのである。

「それならばと、さっそく B & G 海洋クラブを立ち上げましたが、手を挙げてくれたのは、ヨットやウインドサーフィンをしていた知り合いの 4 名だけでした」

なんとも心寂しいスタートではあったが、地元の観光協会で役員を務めながらモーターボートのイベントを島に誘致したこともあった陶山さんだけに、人の関心を集める仕事には慣れていた。産声を上げた海洋クラブの活動は、人目に触れやすい国道沿いの浜で行われ、当時は珍しかったウインドサーフィンの練習を積極的に展開しながら島の人々の興味を誘った。

その甲斐あって、海洋センターの完成とともに海洋クラブの活動も順調にスタート。冒頭で述べたとおり、あっという間に定員 25 名の子供が集まり、大人の会員も 30 名を超えるに至った。

「よく、島の子供たちは視野が狭いと言われ、どうしたらその問題を解消できるだろうかといった悩みがありました。マリンスポーツを楽しむことを考えたら小豆島は最高の場所ですから、ようし！海洋クラブの活動で子供たちの目を外に向けてあげようって思いました。幸い、当時は B & G 財団さんが少年少女向けにマリンスポーツの全国大会を毎年開催されていましたから、それに参加することを一番の目標に掲げることができました」

東京で開催される全国大会に出場するためには、香川県大会、四国大会を勝ち進まなければならない。当然ながら、こうした地区予選を突破するために、子供たちは島を出て本州や四国の各地へ足を延ばし、最終目標である全国大会をめざした。

「全国大会を制覇して、ディズニーランドに行こう！」。これがクラブで考えた合い言葉だった。子供たちは練習に励み、ヨット、カヌー、カッター、ローボート、そして一時期採用されたダブルスカルといった、あらゆる種目に挑戦。バスを 1 台チャーターして試合に出向くほど、選手の層も厚くなっていった。

「おかげさまで、カッターやローボートは全国大会で6連覇を達成したこともあり、ディズニーランドへ何度も遊びに行く子供が出てきました。もともと島の子たちは海に関心があり、しかも純粋で練習熱心です。そんな子供たちが他の土地に行って試合で勝つと、どんどん自信をつけていきます」

陶山さんは地元の学校に掛け合い、大会で入賞した子には、かならず朝礼のときに全校生徒の前で表彰状を渡してあげるよう計らった。ディズニーランドといい表彰といい、ちょっとした気配りではあったが効果は抜群で、海に出る子供たちのヤル気はどんどん高まっていった。

高まった大学への進学率

全国大会で、しだいに名を広めていくB&G内海海洋クラブだったが、かならずしもスポーツに長けた子供たちばかりが選手になっていたわけではなかった。

「B&Gの全国大会は毎年夏に開催されていましたが、この時期は少年野球大会や少女バレーボール大会、そして校内の水泳大会なども行われます。そのため、運動神経の良い子供たちは、こうした大会に目が向いてしまって、なかなか海洋クラブに足を運んでくれませんでした」

陶山さん曰く、海洋クラブにやってくる子供たちは、少年野球や少女バレーボール等でレギュラー選手になれない、どちらかと言えば体育よりも勉強が得意といったタイプが多かったという。

「剣道の素振りをさせてもタイミングが合わないような子も、ヨットに乗っていました。ですから、みんな最初は海に出るとき恐々としていましたが、そんな子でも練習を重ねるうちに動作は機敏になっていくものです。逆に、ヨットなどは1つ1つの理論を積み重ねていくスポーツだと言われ、レースでも戦術を考える要素が多いですから、体育は苦手でも勉強ができる子供たちにとっては、もってこいの競技でした」

球技などでスポーツに苦手意識を感じていた子供たちは、海洋クラブで自信を取り戻しながら、どんどん腕を上げていったという。そして試合に勝って朝礼で表彰されると、周囲の注目を集めた。

「あの子にできるんだったらうちの子にもやらせてあげたい、という親が急増しました。野球で苦い思いをしていたような子供たちが海洋クラブで活躍し

てくれ、全国大会を制覇する選手が何人も出ました」

強くなればなるほど大会に出る機会は増えていくが、そもそもクラブの活動は子供たちに見聞を広めてもらいたいという願いからスタートしている。そのため、陶山さんはB & G財団が主催する海洋セミナーへも積極的にクラブの子供たちを参加させていった。

「いかに子供たちの視野を広げるかという点がクラブ活動のテーマでしたから、海洋セミナーの募集が始まるとクラブ全員の子供に声を掛けていました。その結果、ほとんどすべての子が沖縄やグアム、サイパンに行っています。こうした体験で地方の友だちをつくることができるし、見聞きしたことで生活の幅が広がります」

海洋クラブの活動が定着していくにつれて、大学への進学率が高まっていったそうである。多くの子供たちが島の外へ出て見聞を広めた結果ではないかと陶山さんは考えている。

忙しい現代の子供たち

平成5年、島のなかにオートキャンプ場や国民宿舎などを備えた総合レクリエーション施設、「小豆島ふるさと村」が池田町の出資で建設されると、陶山さんは職員として迎えられ、施設の運営に携わるようになった。

「すでにB & G育成士も何人か誕生していたので、従来の内海B & G海洋クラブは彼らにバトンタッチし、私は『小豆島ふるさと村』の施設を使って新たにB & G池田海洋クラブを立ち上げました」

最初に島で海洋クラブをスタートさせてから14年、この間に時代は大きく移り変わっていた。

「新たな海洋クラブをつくろうとしたとき、従来のような考え方が通用しなくなっていることに気づかされました。いまの子供は塾などに追われて本当に忙しいんですね。平日の練習もままなりませんし、毎週土日まるごと練習に充てるといったことも、できなくなっています」



「今の子供は忙しくて、一つのことだけに熱中することが難しくなった」と心境を語る陶山氏

普通なら、いままでの成功を考えて頭を悩ませてしまうところだが、陶山さんは違った。

「それなら、それで構わないと思いました。大会で上位を狙うのではなく、ヨットやカヌーを楽しむクラブにすればいいと考えたのです」

マリンスポーツにこだわらないところも特徴的だった。クラブを通じて、いろいろな遊びを楽しみながら仲間を増やし、交流の輪を広めるというコンセプトである。

「現在、毎年1、2月になると海洋クラブでスキー教室を開催して、マリンスポーツに関心のない子供でも楽しめるように配慮しながら、参加してくれた子供たちにヨットやカヌーへの活動も呼びかけています。また、夏になると遠足を実施しており、去年は室戸にある少年自然の家に泊まってヨットを楽しみ、近くで開催されていた国体に、海洋クラブの親で指導もしてくれている人が出場していたので、みんなで応援に行きました」

今年は、愛媛の国立青年の家に行ってカヌーの川下りを楽しんだあと、松山にできたジュニアヨットクラブを訪れて交流を深めたという。スキー教室や遠足には同行する親たちも多く、家族ぐるみでクラブ活動を楽しんでいる様子が見ええる。また、楽しい活動を通じて子供たち同士の連帯感が強まれば、知らずのうちに普段の練習にも精が出てくる。

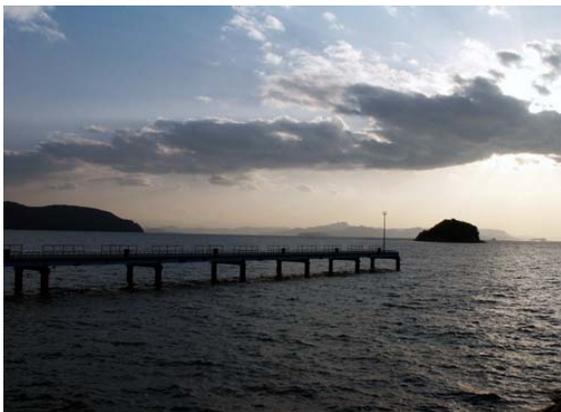
「日々の生活が忙しいだけで、競技に参加して活躍してみたい気持ちは、いまの子供たちにもあるんです。確かに、昔に比べて海に出る時間は減ってしまいましたが、競技の前になると、みんな真剣に練習しています。そんな子供たちは、塾とクラブ活動の時間を実に上手にやりくりしています」

去年はジュニアの全国ヨット大会で3位に入った子供もいたそうで、強さの伝統だけは守っていかうという姿勢が子供たちには見られるという。こうした健気な子供たちの気持ちを大切にしていあげようと、陶山さんは比較的容易に企画できる、近隣の海洋クラブとの対抗試合に力を入れている。

「まったく競技をしなかったら、子供たちはヨットやカヌーに飽きてしまうでしょう。草レースでもいいから、なにかを企画してあげる仕掛けが必要なんです。最近の子供たちは忙しいですが、興味を抱くような仕掛けをしてあげれば、かならず付いて来ます」

近年、「小豆島ふるさと村」を体験型の修学旅行で利用する学校が増えてきており、メニューの1つにヨットやカヌーも導入されている。島の子供たちに見

聞を広めてもらいたいと、わずか4名で始めた海洋クラブだったが、25年の間に蓄積されたその活動ノウハウは、いま修学旅行で島を訪れる全国の子供たちにも広く提供されている。



おだやかな瀬戸内の海。この恵まれた自然環境と子供達が池田海洋クラブのかけがえの無い財産である。



「小豆島ふるさと村」のなかに設置されたB&G池田海洋クラブの艇庫。修学旅行生などに貸し出す際の利用料はクラブの運営費に充てられている